

# 平成18年度最終報告書

被助成者 (特活)アジア日本相互交流センター・ICAN ㊞

コード	
番号	06-A-287

## フィリピンにおける「危機に晒されている子どもたち」の調査とシンポジウム等の開催

### 1、活動の目的・背景

私たちICANが14年間に渡ってともに活動を続けてきたフィリピンの子どもたちの置かれている「現実」は、「初等教育の就学率 90%以上」といった一般にフィリピンで発表されている諸数字が映し出す「現実」とは全く異なるものであった。

路上の子どもたち、身体的障がいを持つ子どもたち、自然災害の被害を受けた子どもたち、紛争の被害を受けた子どもたち、先住民族の子どもたち、海外出稼ぎ労働者の子どもたち、そしてごみ処分場周辺に住む子どもたち。これらの子どもたちは単に教育や医療等の社会サービスへのアクセスが欠如しているのみならず、経済・政治・社会文化といった枠を超えて包括的に「力」を発揮できない場所に置かれた存在であった。そしてその「力」の欠如こそが、子どもたちを統計にも反映されない「声のない存在」へと追いやっていた。

声をあげる子どもたち、そしてその声に耳を傾け、社会に反映させていく大人たちが出会うスペースの圧倒的な欠如がそこにはあり、それこそが直接的間接的な暴力に寛容な社会を作り出している。

この認識に立脚し、本助成事業では危機に晒されている子どもたちが声をあげ、大人達が耳を傾けるスペースを作ることを目的としている。民族や異文化、イデオロギー間での対立といった形で表面化する直接的暴力や包括的な意味での貧困や差別、偏見等の間接的暴力が当事者の子ども達の「現実」に基づいて解消されていく礎となるものである。

活動

・「危機に晒されている子どもたち」に関する調査・報告書(=「こどものこえ」)の作成  
・「危機に晒されている子どもたち」に関するシンポジウム(=Peace in Mindanao Week)の開催  
の2つを実施した。

### 2、「危機に晒されている子どもたち」に関する 調査・報告書(=「こどものこえ」)の作成

#### 2-1、実施経過

2006年12月～2007年6月 調査期間  
7月～9月 まとめ  
10月 製本終了

#### 2-2、活動の内容と方法

ねらい:

路上の子どもたち、身体的障がいを持つ子どもたち、自然災害の被害を受けた子どもたち、紛争の被害を受けた子どもたち、先住民族の子どもたち、海外出稼ぎ労働者の子どもたち、そしてごみ処分場周辺に住む子どもたちなど危機に晒されている子どもたち自身が表現した経験を1冊の本にまとめることにより、子どもたちの「現実」、つまり子ども達がどのような環境に置かれ(事実)、どのようなことを考え(概念)、どのように感じているのか(感情)について、日本の教育・研究機関、一般市民の理解を促進することをねらいとした。これは収入がいくらかといった「事実」に偏りがちであった子ども達の「現実」の捉え方を、「考え」や「感情」を重視するアプローチへのシフトを意味する。

子ども達はワークショップや FGD、インタビューを通じて自分達の経験を表現し、大人達はそれに耳を傾けるといふ

ペースを本書が提供する。

#### 調査方法:

インタビュー、FGD、ワークショップ、文献調査

#### 調査者:

ICAN マニラ事務所スタッフ、及び調査アシスタントとしてロ  
マノ・ワミル氏 (Mr. Romano Wamil)

#### 被調査者:

100人程度の大人と子ども。(ケースとしての掲載したの  
は 16 人の子ども達)

## 2-3、活動の成果

危機に晒されている子ども達16人の経験と概要を含んだ  
本が500部製本された。「はじめに」は添付資料として、  
出版物は貴財団に報告書とともに郵送)

#### 調査結果をまとめた本の内容

題名: こどものこえ

副題: 危機的状況にある子どもの「ために」何かをするの  
ではなく、その子どもたち自身が声をあげ、その「現実」に  
基づいて、「ともに」社会を変えていくために。

ページ数: 104

#### 目次:

謝意

はじめに

フィリピン地図と「こどものこえ」の子どもたち

1章 路上の子どもたち

- こどものこえ 1(アリエール、イザベル、  
ポール、ニコル)

- コラム「子どもの教育と権利」

2章 身体的障がいを持つ子どもたち

- こどものこえ 2(ベイビー、アリス)

3章 自然災害の被害を受けた子どもたち

- こどものこえ 3(カルロ、アルドウィン)
- コラム「現在のフィリピン教育制度」

4章 紛争の影響を受けた子どもたち

- こどものこえ 4(タヤ)

- コラム「生まれたときからある格差」

5章 先住民族の子どもたち

- こどものこえ 5(マデット、ジェイソン)

- コラム「ブラアン族の子どもたち」

6章 海外出稼ぎ労働者の子どもたち

- こどものこえ 6(シェイラ、ジュンジュン)

- コラム「数字から見えるもの」

7章 ごみ処分場周辺に住む子どもたち

- こどものこえ 7(ジェラード、セバスチャン)

- コラム「パイをどう分けるか」

- コラム「歴史から見た教育のあるべき姿」

おわりに

発行団体概要

## 3、「危機に晒されている子どもたち」に関する シンポ ジウム(=Peace in Mindanao Week!)の開催

### 3-1、実施経過:

4月: シンポジウムコンセプト決定

5月下旬~9月: 東京、名古屋、マニラ各担当者の打ち合  
わせ、各スピーカーとの打ち合わせ

9月: 広報開始(各 HP やメールリングリスト、大学、街頭告知  
等)

10月13日マニラ事務所日本人スタッフ帰国。

10月16日拓殖大学の各授業にて告知。

FMCOLOLO(多言語ラジオ放送局)で告知。

フィリピンからのゲストが来日。(23日帰国)

10月17日最終打ち合わせ

### 3-2、活動の内容と方法

ねらい:

ミンダナオ紛争の背景や現地におけるNGOや開発機関  
の様々な取り組みを学ぶ機会を提供し、その中でも紛争下  
の子ども達の状況や ICAN とフィリピン現地 NGO が実施してい  
る「子どもが作る平和」の活動の理解を深めることをねらいと

した。また、一連の活動によりミンダナオで活動しているNGO や政府開発機関のネットワーク構築も目指した。

#### 内容:

期間は2007年10月18日から24日の一週間とし、メインイベントである4回の講演会・シンポジウム以外にも紛争の影響を受けた子どもたちの状況を伝える街頭イベントや日本の子どもと紛争の影響を受けたフィリピンの子どもが絵を通して交流する企画を実施した。

#### ■ 「フィリピン、ミンダナオ紛争における地域型平和構築の可能性について～NGO、ICAN とパライの教育事業を中心にして～」

日時:2007年10月18日(木)  
18:00～20:30

会場:東京都文京区拓殖大学文京キャンパス

参加費:無料

参加者:43名

スピーカー:

Mr. Ernesto A. Anasarias  
Balay Rehabilitation Center, INC  
(ICAN のフィリピンパートナーNGO)  
森崎 由希(ICAN)

概要:以下のテーマを中心に講義を実施した。

- ・ 紛争地に住む住民や子どもの目からみたミンダナオ紛争の「現実」
- ・ 平和構築におけるNGOの役割
- ・ 住民が主役の地域型平和構築事業
- ・ 平和を培うスペースとしての子どもの宣言 (Declaration of Children as Zones of Peace)等

#### ■ ”Community Based Peace Building”

日時:2007年10月19日(金)  
13:00～14:30

会場:東京都三鷹市国際キリスト教大学(ICU)

参加費:無料

参加者:約30名

スピーカー:

Mr. Ernesto A. Anasarias(同上)

概要:以下のテーマを中心に講義を実施した。

- ・ 紛争地に住む住民や子どもの目からみたミンダナオ紛争の「現実」
- ・ 平和構築におけるNGOの役割
- ・ 住民が主役の地域型平和構築事業
- ・ 平和を培うスペースとしての子どもの宣言 (Declaration of Children as Zones of Peace)等

#### ■ 「ミンダナオの歴史、そして今～平和構築と教育～」

日時:2007年10月19日(金)  
19:00～21:00

会場:東京都新宿区EPO会議室

環境パートナーシップオフィス(EPO)内

参加費:500円

参加者:28名

スピーカー:

玉置真紀子氏  
(特活)ピラーンの医療と自立を支える会(HANDS)理事、東京フィリピン研究会メンバー、東京江戸川大学非常勤講師

Mr. Ernesto A. Anasarias(同上)

概要:以下のテーマを中心に講義を実施した。

- ・ ミンダナオの歴史と文化、紛争の背景
- ・ 紛争が及ぼす子どもへの様々な影響
- ・ 紛争下での子どもの教育環境
- ・ ICAN の教育事業

また、講義前後にミンダナオ島先住民族の人々が製作したクラフトの展示・販売を実施した。

#### ■ 「ミンダナオの平和を願うシンポジウム」

日時:2007年10月21日(日)  
14:00～17:30

会場:愛知県名古屋市伏見ライフプラザ

**参加費:**800円

**参加者:**48名

**スピーカー:**

中島隆宏氏

アジア保健研修所(AHI)主任主事

落合直之氏

独立行政法人国際協力機構(JICA)アジア第一部  
第一グループ東南アジア第二チームチーム長。

Mr. Ernesto A. Anasarias(同上)

**概要:**以下のテーマについてシンポジウムを実施した。

- ・ ムスリム・ミンダナオ自治区の伝統的な社会や成り立ち・抱える課題
- ・ 参加型研修を通じた平和構築事業
- ・ ODAを通じたミンダナオ平和構築の取り組み
- ・ ミンダナオ紛争における IMT(国際監視団)等国际社会の取り組みについて
- ・ 地域型平和構築活動
- ・ 子どもや若者が主体の平和構築活動
- ・ 様々なレベルでの平和構築の重要性

#### ■ 「ミンダナオの木」

シンポジウム開始前と開始後に、「ミンダナオのイメージ」をポストイットに記入してもらい、比較した。それを会場内に掲示することにより参加者・スピーカー間で共有できるようにした。

#### ■ フィリピンの子どもたちとの交流

日本の子どもとフィリピンミンダナオの紛争の影響を受けた子どもたちの相互理解を促進するために、愛知県下の中学生が日本紹介の絵や平和のメッセージを描き(書き)、シンポジウムで展示を行なった。その後、これらはミンダナオ島紛争地ピキットの小学校へと届けられた。

### 3-3、活動の成果

#### ■ 多角的な視点の提供

フィリピン NGO(パライ)、日本の NGO(ICAN、AHI、HANDS)、政府援助機関(JICA)という多様な立場から、中央政府、自治区政府、州政府、村、コミュニティなどの様々なレベルで実施しているインフラ、保健、教育等の様々な事業について意見交換をすることができた。また、それぞれの立場から「紛争」についての認識を共有する機会を提供することができた。これにより、多角的なミンダナオの現状の理解の促進につながった。

#### ■ 「子どもの参加」をもとにした平和構築活動

紛争の影響を受けた子どもたちが置かれている危機的な現状を共有するだけでなく、主体的に平和構築活動に取り組む子ども達の存在を共有する機会となった。政府・反政府のリーダーや国際社会の役割と捉えられがちな「平和構築」のイメージに一石を投じるものとなった。

#### ■ 団体間ネットワーク基盤の構築

これまで、フィリピンのミンダナオ島という同一地域で同じ課題に取り組んできた団体が、このような国内イベントを協働で実施したことがなかった。今回のシンポジウムの開催を通して、改めて課題の捉え方や立場を知ることができたことにより、お互いの活動・団体への理解が深まり、次へのステップの足がかりを掴むことができた。

## 4、所感

調査・執筆にあたり、私たちは、ICANの事業に参加する子どもたちのストーリーに改めてじっくり耳を傾ける貴重な機会を得た。子どもたちが自らの言葉で私たちスタッフに語ってくれたストーリーひとつひとつが、彼ら・彼女らの「支援者」ではなく、「パートナー」として事業を進めていくわたしたちの肩に重くのしかかる。

子どもが発する言葉や声、表情、そして共に生活した限られた時間は、わたしたちにとって「気づき」の連続であった。

この執筆は、「子どもが話してくれること」が大前提であった。しかし、子どもたちの中には、自分のことを語ることを恥ずかしがったり、躊躇する子も少なくない。ましてやその未だ短い人生の中で愛する母親や兄弟を失った子どもはなおさらである。訪れたコミュニティには、痛みを伴うストーリーが多いのも事実であった。まず「どの子どもと話をするか」というスタート地点でスタッフは頭を抱えた。執筆のために「必要な情報だけを一方的に得る」わけにはいかないからだ。

### ■ 大人の影にかくれた子どもの世界

子どもたちとの出逢いはわたしたちに、いかに子どもの存在、また彼ら・彼女らの経験までもが、「大人」というフィルターを通してでしか出逢うことの出来ない「大人の後ろ」に隠された世界であるかを教えてくれた。コミュニティでまずわたしたちの「話し相手」となったのは、いつでも必ず「大人」であった。この「見える大人たち」が、子どもの居場所を教えてくれ、子どもの体験のあらすじを代弁し、どの子に話を聞くべきかと助言をくれた。時には、「話が出来るか、出来ないか」という子どもの性格や能力まで教えてくれた。この執筆の目的は、「大人のよく知っている子ども」に焦点を当てるのではなく、「子どもたち自身が発したい声」に出逢うことであった。しかし、子どもたちの姿は眼の前にたくさんあるのに、子どもたちの「声」よりも、いつも大人たちの「声」の方が大きく、子どもたちの「言葉」を出発点にすることは想像以上に困難であった。

### ■ 保護 と 「参加」

災害後のレイテ島新ギンサウゴン村では、孤児の子の声や気持ちを聞かず、修道女たちが彼ら・彼女らを収容し養育するための孤児院の建設事業の話があった。「受益者」と指定された子に会い話を聞くと、「家族(親戚)と暮らすほうがぼくは幸せだ。」という。そうならそうだとはいえないではないか。しかし、彼は、「でも、とりあえずそこに入るしかない。奨学金援助まで断ることになってしまうから、それは困る。自分で生きていけるようになったら、そこを去れ

ばいい」と言うのである。

このように、実際に大人たちがよかれと思って準備された資金援助や施設が、子どもの能力や意思や幸福になる選択肢を「見えないところで」潰してしまう可能性もある。子どもの発育や養育にとって何がその時に必要なかを大人が考えて「あげる」ことはできない。そこには、相談という、当たり前のプロセスが抜けており、子どもに「大人と異なる声」があることを知ろうとしないわたしたちの姿勢は、子ども自身の力や自由意志を奪う大きな危険性を秘めている。「子どもの参加」が社会からの「保護」と相反するものではない。従来、普遍的であるとされてきた「大人の役割」を子どものコンテクストにおいて、柔軟に見直す必要があることを学んだ。

### ■ 子どもにとっての「参加」

子どもの声を聞くプロセスは、わたしたち大人がうまく効率的に子ども対象事業の効果をあげるための手段でもなければ、「子ども向けイベント」でもない。子どもの声を聞くことは、人間ひとりひとりの選択肢や潜在能力や夢を最大限に広げる努力である。大人と子どもの関係が、「選択肢を創る側」と「選択肢を与えられる側」であることは、その努力と反する。大人と子どもが対等なパートナーとして、信頼関係を築き、ともに試行錯誤のもと選択肢を創っていくプロセスが大切である。そのためには、教育や保護の形態なども、当事者らとともにデザインしていくことが重要である。

しかし、実際、現時点ではわたしたちの出逢った子どもたちの多くは、自分たちにその権利があり、力があることを知らず、「参加」のスタート地点に立てない状況に置かれている。この背景には、多くの子どもたちにとって、そもそも「参加」の機会がなさすぎることが原因のひとつとして挙げられる。

コミュニティで逢った子どもたちの中には、援助機関などが主催する子ども向けワークショップやセミナーに参加した経験をもつ子もいたし、持たない子もいた。参加していない子どもに、「どうして一緒に行かなかったの?」と聞くと、「ほかの子どもたちが対象だったから」とか「分からない」などの返答が多く聞かれた。子どもにとって、「参加」とは、「招待状」がなければ保証されないものであり、自分たちに必要な

何かを仲間と知恵を出し合い計画したり、実施したりするプロセスではない。仮にワークショップが子どもの権利条約についての内容であっても、その会場のすぐ隣には、招かれなかった子どもが溢れており、「参加」と「非参加」が隣り合わせの現状も稀ではない。

このように、「子どもの参加」の重要性をいくら大人たちが外から叫んでも、子どもたちはそれを実際に体感し理解できる状況にない場合が多い。子どもひとりひとりの社会的な背景や経験によりそれは解釈と意味を異にする。子どもたちとの出逢いで学んだのは、「参加」が指すことは必ずしも1つではないこと、そして多くの子どもたちにとって、参加とは、断片的な経験を意味するものでしかなく、その多くは、「意思決定の過程に参加すること」とは異なるということであった。「参加すること」＝エンパワメントではなく、「参加」が、何への参加か、何を目的とする参加であるのか、自分ひとりだけではなく、周りの人間をどこに導く参加であるのか、ということ常を常に念頭に置くことが大切である。

#### ■ 「子どもの参加」と「大人の参加」

子どもたちひとりひとりは、自分や家族の身に起きていることを注意深く観察している。そして、身体でどんな小さな変化も感じ取り、なぜそうなっているのか、と他のことと関連付けて考える能力も洞察力も持っている。自分が体験したことを関連付けて言葉にすることもできる。悲しい経験があれば、それを乗り越えるために自分には何ができるのか、家族が再び辛い思いをしないようにはどうすればいいのか、日々考えている。しかし、なぜいまの現状(学校に通えない、3食食べられない、お母さんが海外に出稼ぎに行く、治療が受けられない)に生きることになったのか、という根本的な原因はなんだと思うかと聞くと、子どもたちは、「貧しいから。」「みんなここはフィリピンではそうだから。」と応える。わたしたち大人は、子どもの無知さ、幼稚さ、客観的な理解能力の欠如などを子どもの性質とするが、実際に子どもの親に同じ質問を投げかけてみても、似たような答えが返ってくる。

コミュニティの中で、わたしたちは「その現状を改善するために教育が大切だ」とほぼ100%の住民が口をそろえて言うのを耳にしてきた。しかし、そもそも身を削るような努力をしても生活が改善されない現状はどこから来るのかと疑問を持ち、自らが、自分たちの行く末を決める話し合いから排(exclude)されているという点に意義を唱える風潮は弱いように思う。

子どもの参加の重要性だけを執拗に唱えるよりも、その子どもたちの親がどのような状況に置かれているのかということも考えながら、「大人の参加」も平行して考えなければ、大人と子どものよりよいパートナーシップは構築できない。子どもの参加は、そのプロセスを飛ばしては、実現しない。

数々の子どもたちとの出逢いの中でわたしたちは、「子どもの参加」を難しくしているのは、わたしたち大人であることに気付かされた。「大人の世界に生きる子ども」や、「誰かが決めた世界の構造に生きる大人」を作らないためには、大人と子どもの隔たりなく、ひとりひとりが自分の声を潰す存在やシステムを変えていくために、ひとりひとりの小さな声を集めるところから始めなくてはならない。

## 5、今後の課題

### ■ より一層の「参加」を促進

調査・製本の過程でICANの事業のパートナーである子どもたちの声をまとめ、「参加」の重要性について再確認できたことはとても貴重であった。この経験を次年度以降の社会開発事業に活かし、より「参加」を促進していき、危機に晒されている子ども達の状況を子ども達とともに改善していくことが求められている。

### ■ より一層の「参加」の理解を促進

日本国内では依然として子どもの参加についての理解は十分ではない。危機に晒されている子ども達が置かれている現状を変えていくために、どのように具体的に子どもの参加が社会を変えるのか、子どもの参加の可能性を継続して提示していく必要がある。

## ■ 団体間ネットワークの今後

今回 Peace in Mindanao Week に参加していただいた団体(NGOs、JICA)、そしてそれ以外の NGO やミンダナオに  
関係する JBIC や大使館関係者、大学関係者やコンサル  
等と、講演会やイベント、情報交換のレベルを超えて、ど  
のような形での協働が実現可能かを模索していく必要が  
ある。アクター間の得意分野やそれぞれの長期事業計画  
等を照らし合わせていく作業が考えられるが、それは All  
Japan 的コラボレーションを目的とするのではなく、その地  
域の過去と現在、将来のガバナンスを踏まえた包括的コ  
ラボレーションでなければいけない。

## 謝辞

私たち地域開発ワーカーは、コミュニティにおける目先  
の危機にほとんどの精力が取られ、自分達が日常的に経  
験していることを分析する余裕もない場合が多い。気がつ  
くとより大きな構図が見えなくなっていたり、物事を批判的  
に捉える力を失っている自分達に気がつく。

そのようなときに、立ち止まり、コミュニティの時間の流  
れに身を任せ、「こどものこえ」が出てくるまで子ども達と信  
頼関係を築いていく作業は、子ども達と私たちの関係を再  
定義し、私たち自身の「視点」をも変えてしまうほど有意義  
なものであった。

今手元にある申請書を読み直し、私たちのこの1年の  
成長を感じている。この団体の成長を、具体的なこどもと  
の活動において実践していく責任を感じざるを得ない。

このような機会を与えてくださった、そして多くの団体に  
このような機会を与え続けている貴庭野平和財団の皆様  
に、心より感謝いたします。

(以上)

(添付資料)

## 「こどものこえ」(調査結果をまとめた出版物)

はじめに:

フィリピンミンダナオ島北コタバト州ピキットでは、長引いた  
紛争の影響で多くの子どもたちの命が失われました。生き残  
った子どもたちも心に大きなストレスを抱え、それを癒すのは  
容易ではありません。また、マニラ首都圏の路上や線路沿  
いで生活する子どもたちの多くは、虐待や家庭崩壊、麻薬  
や暴力と背中合わせの厳しい環境に置かれ、誰にも頼るこ  
ともできず、日々自分で衣食住のニーズを満たして生きてい  
ます。

リサール州の山奥の集落サンイシロでは、雨季になるとド  
ウマガット族の子どもたちは、薄暗い早朝から3時間かけて、  
毎日泥の山道を裸足で通学します。ミンダナオ島ジェネラ  
ルサントスのブラアン族の子どもたちは、十分な食事を家庭  
で取ることができず、空腹のために通学意欲を失っています。  
そして、家族の必要を満たすように、子どもたちも農業労働  
に従事し、学校に毎日通える子どもたちは多くありません。

多くの死者が出た自然災害でなんとか助かっても、避難  
所で最初に命を落とすのも子どもたちで、生き残ってもその  
社会的、精神的苦痛はその後の長い人生の間、続いてい  
きます。身体的な障がいを持つ子どもたちは、無理解な人  
びとから差別を受け続けています。また、親がよりよい生活  
を求めて海外に出稼ぎに行き、国に残される子どもたちは  
増える一方です。そして、ごみ処分場周辺に住む子どもたち  
は、今日も病気や危険と隣り合わせの生活を送っており、命  
を落とす者は後を絶ちません。

私たち ICAN(アイキャン)はそのような子どもたちと、  
1994 年から現在まで活動を続けてきました。社会的弱者  
である子どもたちの状況は、同時に私たちの社会状況を表  
す鏡とも言えます。現在の世界構造のゆがみは、フィリピン  
をはじめ所謂「南」と呼ばれている国や地域に住む子ども  
たち、そしてその中でも弱い立場に置かれている「危機的状況

に置かれている子どもたち」を政治的にも社会文化的にも経済的にも、危機的な状況に追いやります。

しかし、そんな「危機」の中を、多くの子どもたちは、傷つきながらも戸惑いながらもたくましく生きています。子どもたちは、自分なりに自分や愛する家族たちの置かれた状況をなんとか改善しようとしています。子どもたちはまわりの大人たちや出来事をじっと見つめており、それらを自分なりに説明する言葉をもっています。子どもたちには希望があり、夢があります。お腹いっぱい食べる夢、生活に苦む両親に楽をさせる夢、学校に通い勉強する夢、家族揃って楽しく暮らす夢…。ただ子どもたちの声は、社会的に価値を置かれず、大人たちは子どもたちの語りに耳を傾けることをしません。多くの人にとって、このような子どもたちは、「貧しく」、「可哀想」で、「助けを待っている」存在、ときには「わずらわしく」、「邪魔な」、「汚い」存在に過ぎません。多くの開発機関にとっても、「援助」の「対象」や「受益者」ではありません。

一方で、このような子どもたちを主体的な存在として認めようという動きも世界各地で少しずつはじまっています。この地球上の約 1/3 の人口を占める「子ども」を弱い、受身な存在と見るのではなく、社会を構成する積極的な存在として捉え、その経験を重要視する動きです。ここでは年齢や性別、経済的地位や身体的条件、出身階層等に関わらず、生活を左右する決定に「参加」し、住みたいと思う世界を築き上げることに「参加」することは人間の、そして子どもの権利とされています。これがユニセフや ICAN のような NGO が推進している「子どもの参加」と呼ばれるものです。

(元)路上の子どもたちが自分達の経験を振り返り、分析し、表現し、多くの人達と共有し、その声が大きくなるにつれ、人々の路上の子どもたちへの対応は変わってきます。政府の路上の子どもたちへの政策が路上の子どもたちの視点からみてより適切なものになっていきます。路上の子

どもたちを生み出すより根本的な原因に働きかけ、多くの路上の子どもたちの生活を改善することができます。また、学校のカリキュラムを紛争地の子どもや先住民族の子どもたちの視点に立ったものに変えていくこともできますし、村役場の計画に子どもの意見を取り入れていくことなど「子どもの参加」の可能性は無限大です。

人類の歴史をみると、社会は経済的・社会文化的、政治的に力のある人の価値観に大きく影響を受けた形で作られてきました。一方、子どもたち、特に危機的な状況にある子どもたちや女性等、「比較的力の弱い」人たちは自分たちの経験を振り返り、分析し、自分たちの「現実(Reality)」を表現する能力をもっているにも関わらず、社会に参加することが阻まれてきました。その権利としての参加が阻まれた状態こそが、社会の中の「貧困」や「差別」等、社会の中の様々な非正義・不公正というものを生み出している原因でもあり、結果とも言えるのではないかと私たちは考えています。

「こどものこえ」を大きくしていく活動(=子どもの参加)とは、与えられるはずであった「参加」の権利を取り戻すプロセスであり、社会の中で力を出し切れない状態に追いやられていた人達が自分の力を回復するプロセス(「エンパワメント」のプロセス)でもあります。またこれは、当事者である子どもたちが「貧困」などの非正義・非公正を主体的に解決していくプロセスです。つまり、「こどものこえ」を大きくしていく活動は、手段でもあり、それ自体が目的ともなります。

私たちが活動を進める過程で感じてきたことは、このような「こえ」をあげる子どもたち、そしてその「こえ」に耳を傾け、社会の中に反映させていく大人たちが出会うスペースの圧倒的な欠如でした。そのような問題提起に立って、本書ではまず子どもたちが共有してくれた経験に耳を傾けることを、皆さんとともにおこないたいと思います。そして、同時に以下の副題の意味について考えていくことができればと思います。危機的な状況に置かれた子どもたちの生活が向上するためには「こどもの『ために』考え、行動するのではなく、こどもと『と



もに『考え、行動する』という私たちの振る舞い方の転換が  
求められているように思います。

危機的状況にある子どもの「ために」  
何かをするのではなく、  
その子どもたち自身が声をあげ、  
その「現実」に基づいて、  
「ともに」社会を変えていくために。

以上